

文芸の視点から

― 静御前伝説において ―

内藤 浩誉

筆者はこれまで、全国各地の「静御前」伝承を取り上げ、いかに伝説が地域社会に根ざし、歴史の中で展開されてきたかを追究してきた。様々な分野で見出される多様な静御前像について考察を重ねる中で、その印象が語られる時、「賢く」「しとやかで」「忍耐強く」「芯の強い」女性、と形容される傾向がある

のだが、これらは「静」という音義から発せられる面が強いと考えられる。しかし一方、文芸を繙くと必ずしも「おとなしい」場面が描かれているわけではない。夜襲をかけられた源義経の窮地を救った「堀川夜討」で描かれる静御前の「長刀を持ち、振り回す」姿は強い印象を与え、また芸能や絵画など視覚で捉えやすい表現において顕著といえる。静御前を音だけで捉えたのなら、このような姿は出てこなかったであろう。民衆が受け入れ、定着し納得させる根拠があるからこそ、文芸や伝説の物

語性は膨らむ。

伝説人物のイメージは一体どこから来て、何を反映しどのような影響を及ぼすのだろうか。人々の心理心情がいかなるものかを窺うことは、ある事件を受け止める各時代毎の庶民の歴史認識を追究することに値しよう。

今回は、例会シンポジウム「伝説研究の新潮流」というテーマの下、「静御前」という固有名詞を軸に伝説の様相を文芸から捉え、武勇の静御前伝承の事例を挙げながら、伝説における視覚的要素の意義、伝説の変遷を辿る中で見られる歴史認識について、発表したことを報告する。尚、詳細な論考はまた別の機会に改めることとしたい。

二

「堀河夜討」は、いわゆる歴史事件である。源頼朝の命を受けた土佐坊昌俊が義経宅を襲ったと、『吾妻鑑』「文治元年十月十七日」の条に記載がある。ここでは静御前の記述はなく、当日の動向は不明である。一方、『平家物語』『義経記』等軍記物語では、静御前は機転を利かせ、機敏な行動で義経の危難を救う。この賢明で勇氣ある印象が、表象における「勇ましさ」に変容する。例えば、『本朝女二十四孝』等近世の教訓書では「主を助ける理想的な女性」として見なすにあたり、静御前の武勇伝を紹介する。

静御前の戦闘場面は、能『正尊』（中世末期）のへ打ち寄せ敵を相手に静も切り払い」という詞章に伴う形で武器を手にする身振りから現れる。以降「長刀を携える静御前」という表現事例がいくつも見出せるのだが、『正尊』で振り回すのは長刀ではなく小刀である。長刀を抱え（寛永版舞の本『堀川夜討』挿絵等）、あるいは振り回す（東洋文庫蔵流布本『義経記』の丹緑絵等）静御前像は寛永頃から窺えるようになり、時代が下るにつれ、浄瑠璃『義経千本桜』『義経静人目千本』など身体動作を伴う芸能、及び黄表紙・錦絵など絵画作品の画像において、静御前と長刀が結びついた姿が定着する。

また、各地には静御前と関わる長刀伝説が窺える。徳川将軍家や前田家を始めとする複数の武家での宝蔵品、あるいは江戸・浅草寺、紀州・浄土寺、摂津・尼崎、淡路・志筑神社等への奉納品に、静御前の名は付随する。

こうした伝承の背景を鑑みるには、長刀自体の歴史を窺う必要がある。中世において長刀を扱うのは僧兵であり、戦場での使用が主であった。近世になると力のない女性でも扱える様に改良され、通称「静形」と呼ばれる男長刀と「巴形」と呼ばれる女長刀が現れた。両者共に、女性の武男性が名称の由来になっている点が興味深い。さらに江戸時代、様々な流派が登場するが、義経発明の方法を静御前が伝授したという由来起源説を持つ「静流」が現れる。ここでも、実用に物語性が加わる際に静御前が結び付く。

実際、長刀は女性の護身用道具として武家の婦女が教養・人格修養として習うもの、また婚礼道具として重宝される物であった。明治以降も子女の教養として習われ、戦中には長刀体操なるものが考案された。戦前まで盛んであった長刀だが、終戦後禁止されて衰退、現在では新しい研究に基づきながら、今までとは異なる意義の下普及している。

静御前と長刀が結び付く理由には、刀鍛冶志津氏の存在が音によって関連づけられるが、島津久基氏が説くように、元来静御前に「長刀」と結びつくだけの武勇的要素があったのではなからうか。つまり、呪的威力を持つ「白拍子」という本質を踏まえ、武勇と静御前は結びつき、その上で鍛冶師が引きつけられたと考えられよう。

堀河夜討は偶発的事件であるが、連想事項がある故に、語りや表現において多様性を持つ。「静御前の長刀」はまさに近世を背景に生み出された伝承の「事物（シンボル）」であり、一つの歴史認識、忠義の象徴といえる。各地の静御前長刀伝説の実は、現在では目にする事ができない。おそらく太平洋戦争後の社会状況の一変により没収された可能性が考えられる。戦時という時代下での流行と衰退の変遷に、伝説もまた時代の風潮や思想に翻弄される様子が見て取れる。

浅草寺には、静御前にまつわる事物が二つ見られる。一つは、浅草寺蔵の「静御前の長刀」〔浅草寺志〕『江戸名所図会』『未刊甲子夜話』『遊歴雜記』等〕。これは浅草寺の鴨居に掛かっていたといい、近世以降よく知られていたようだが、現在行方は不明である。

もう一つは、江戸時代末期、歴史画の確立で有名な菊池容齋³⁾が、浅草・観音信仰に基づき依頼してきた願主に応えて描き話題になった絵馬「堀河夜討」⁴⁾。浅草という「地理・地域性」と「堀川夜討」の結びつきは興味深い課題であるが、歴史画の萌芽において果たした菊池容齋の意識や役割、歴史画を取り巻く時代状況は一考すべきことである。

更に、「目にする」と「語る」の関係について、留意したい。長刀や絵馬を観た人々が何を感じ、どう語るのか。つまり、頭の中で映像化して言葉で発するにあたり、視覚的印象はその人物像の形成や話題性に影響を与えるであろう。そもそも、伝説の三要素の一つ「事物が伴う」という条件は、視覚的要素を含むものである。例えば『未完甲子夜話』には、筆者・松浦静山が浅草寺のこの絵馬を実際に見たいと熱望する様子が記述される。事物を実際に確認することによって納得するという心情が働く点は、見逃せまい。そして、事物を前にすることによって、

事件（事実）そのものに留まらず想像力を加えつつ一つの歴史認識に則って、人々は事件を語り、伝説もまた生成されると窺える。

静御前の特性の一つは、「白拍子」という職能、つまり舞踊で視覚的に表現できる要素を持つことで、伝承生成においても奥深さ・幅広さをもたらすと考えられる。そういう意味においても、作画において意図を持たせる絵師という存在、画壇の主流傾向は軽視できない。

四

文芸に現れる武勇の静御前像は、歴史事件と結び付いた物語の中で発展し、時代を反映する伝説として形成された。伝説は、過去に焦点を当てつつも、「現在」「現場」の意識がまわりつき生成土壌となる風土性と変遷過程の時代性が絡むことによりつて創出され、その時・場に居る人々と共に生きている。今を顧み未来志向を併せ持つ故に、表出する歴史認識、伝説が内包する視点を捉えることが必要であり、伝説の変遷を辿る意義がある。

また、伝説は耳口で交わされる言葉で構築される世界でありながら、象徴となるべき「事物」を伴う点に、視覚に訴える要素も求めている。視覚が得る情報によってもたらされる二つの「そうぞう（想像・創造）」が耳と口の表現に刺激を与える、そ

して何らかの共感・共通意識を共有する手段となっているということも、伝説の研究において考察すべきであろう。音義による発想・連想と共に、注視したいことである。

注

(1) 鎌倉末期、相州正宗の弟子で十哲の一人に数えられた初代・志津三郎兼氏(包氏)が美濃国多芸郡志津に移住、その後門弟が直江に移り、直江志津と称した。

(2) 島津久基『義経伝説と文学』一九三五 明治書院

(3) 一七八八〜一八七八。狩野派の画法を学び、有職故実・大和絵の研究を行う。考証重視・写実主義に基づきながら、内外の史実を流派・技法の別なく扱う新ジャンルとして「歴史画」を確立、明治期に活躍しながらもその後近代日本画史に埋もれた画家である。上古から中世の忠臣・烈婦を肖像化し略伝を付した『前賢故実』十卷(十一年の歳月をかけ天保七年に完成、明治元年刊行)は、当時流行し、俊英たちの多くが手本・引用とした。

(4) 『浅草寺絵馬扁額調査報告』一九九〇 浅草寺絵馬調査団

(ないとう・ひろよ／國學院大學兼任講師)

シンポジウム／伝説研究の新潮流

歴史の視点から

―「山賊」の伝説とその「系図」の創出―

佐藤 喜久一郎

一、歴史、伝説、主体、イデオロギー

伝説には主体構築の機能をもち、それを通じて歴史をつくりだすものがある。伝説の語りは、暗示や仄めかしを通じて主体に迫り、その感情に訴えてくる。伝説が「真実」として信じられるのはそのためであろう。とくに、集団の歴史を語る伝説や、特定の血管や家筋の由来を語る伝説は、諸個人にアイデンティティと歴史意識を付与して、集団に従属する主体を構築する。むろん、創られるのは自発的に語る力をもつ主体なのだが、この語り手は(私も)彼をとりまく社会的状況や、(先行する語りによって創り出された)想像的な歴史からの制約を受けている。

いずれにせよ、主体はサバルタン性(従属性)を回避できない。主体は決して、政治、イデオロギー、経済、歴史、セクシュアリティ、言語などの要素から独立して存在するわけではない(スピヴァック 一九九八)からである。

主体／「固有名詞」の歴史を描出するときには、それらの諸